

桜生工

日本大学生産工学部 校友会誌 | 2025 vol.55

校友会は、いつまでも卒業生とのつながりを大切にしています。



CONTENTS

●日本大学生産工学部 校友会会長 梅谷純生 ご挨拶	P1
●日本大学生産工学部 学部長 澤野利章 ご挨拶.....	P2
●第47回 鳥人間コンテスト2025・滑空機部門出場報告.....	P3
●第18回 風力発電コンペWINCOM2025	P4
●第23回 学生フォーミュラ日本大会2025出場結果報告.....	P5
●令和7年 代議員総会報告	P6
●令和7年度 留学生交流会 (バス旅行)	P7
●母校を訪ねる会	P8
●在校生紹介	
機械工学科 中村 綾音.....	P9
電気電子工学科 五十嵐 啓三郎	P10
土木工学科 東條 七菜	
建築工学科 辰巳 史晃.....	P11
応用分子化学科 三井 さゆり	
マネジメント工学科 森 雅也.....	P12
創生デザイン学科 福岡 千夏	
数理情報工学科 土屋 慶太.....	P13
環境安全工学科 山本 稜大.....	P14
●学科ニュース	
機械工学科	P15
電気電子工学科	
土木工学科.....	P16
建築工学科	
応用分子化学科	P17
マネジメント工学科	
数理情報工学科	P18
環境安全工学科	
創生デザイン学科.....	P19
教養・基礎科学系	



日本大学生産工学部 校友会

会長 梅谷 純生

校友の皆様には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。また、日頃は校友会活動にご理解とご協力を頂いておりますことを深く感謝しております。

そして今後も校友会活動へのご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

さて、日本大学校友会本部は、一昨年7月より大谷喜一新会長を迎え、様々な校友会の改革が実施されてなされてきました。

また、コロナ禍により制限されていた行事についても以前の状態を取り戻しつつあります。

そして生産工学部校友会に於いても、6月に市川グランドホテルにて代議員総会が行われ、終了後、学部内の来賓及び代議員の皆様をお招きし、約200名にて懇親会も開催することができました。

また、11月に行われた桜泉祭時には学部と協力し、10年次毎に卒業生を招待し実施される「母校を訪ねる会」を実施し、今回は約300名の参加を頂き教職員・旧友との懇親を深める場となった。

そして、併せて行われる「風力発電コンペ」では学部内外より参加者を募りものづくりの楽しさを体験し工学への更なる興味を持っていただく場への協賛を致しました。

また、全国放送にて行われる「鳥人間コンテスト」の参戦への機体製作費等への助成を積極的に行い今年度は滑空部門にて3位の成績を収め前述の風力発電コンペと同様にもものづくりの楽しさを応援する活動を応援して参りました。

校友会としては、今後も、校友会活動を通じて母校の発展及び校友の皆様のために尽力を尽くす所存でありますので、倍旧のご指導、ご支援の程心よりお願い申し上げます。

最後になりますが、校友の皆様の一層のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



日本大学生産工学部 学部長 澤野 利章

校友の皆様におかれましては、ご清祥のことと心よりお慶び申し上げます。日頃より生産工学部の教育ならびに運営に関しまして、格別のご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。日本大学は、新体制のもと信頼の回復に向けて管理運営体制の強化を図り、新たな日本大学としての多くの情報を新聞、ラジオ、ポスター、SNSなどの様々なメディアにより発信し続けております。改革はなお道半ばではございますが、校友の皆様にもご支援、ご協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。

2025年度は、学部1,802名、大学院博士前期課程182名、博士後期課程14名の新生を迎え、昨年度より300名ほど多い総勢7,298名がキャンパスに集い、日々講義、実験・実習に励み、充実した学生生活を送り、友達付き合いやサークル活動等、キャンパスには若い力と挑戦する気風に満ちた、大きな活気が生まれております。

校友の皆様にご支援いただいております各種行事も変わらず実施されております。学園祭時に開催される風力発電コンペ、留学生研修イベント(日帰りバス旅行)、桜泉祭、母校を訪ねる会などへの学部行事、入学生や優秀卒業生への記念品贈呈、そのほか学生の部活動などへの活動費補助等、多岐にわたります。

今年は生産工学部公認サークルの「津田沼航空研究会」が「第47回鳥人間コンテスト2025 滑空機部門」で全国第3位、「フォーミュラJSAE」が「第23回学生フォーミュラ日本大会2025(ICVクラス)」で過去最高の総合18位と「ベスト車検賞(第2位)」を受賞するなど、日頃の研鑽が確かな成果として結実いたしました。ここにご報告申し上げるとともに重ねてお礼申し上げます。

本学部の特徴的科目である「生産実習」では、企業や自治体での実習に加えて、海外での就労体験を通して働き方や文化・ビジネスマナー、ビジネススキルを学ぶ海外生産実習(海外ワーク・エクスペリエンス)を積極的に展開しています。これらにより高度なテクノロジーだけでなく、倫理観や美意識、構想力といったリベラルアーツと職業観を涵養する実践的教育を、今後も推進してまいります。

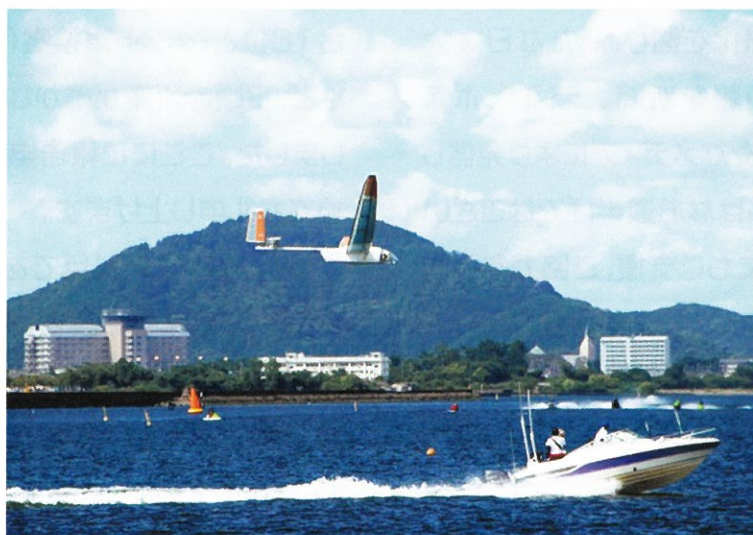
最後になりますが、在学生へのご支援では生産工学部校友会会長ならびに各部会、幹事の方々をはじめとした校友会役員そして多くの校友の皆様のご理解を賜り、心から感謝申し上げますとともに、今後も校友会、卒業生の皆様には生産工学部発展のため、ご支援、ご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

第47回 鳥人間コンテスト2025・滑空機部門出場報告

厳しい書類審査をクリアし、7月27日に彦根市琵琶湖松原水泳場で開かれた「鳥人間コンテスト2025」の滑空機部門に出場することができました。そして、17団体中3位入賞という喜ばしい結果を収めることができました。これも生産工学部と校友会の皆様のご支援・ご協力の賜だと部員一同感謝しております。ありがとうございました。今年の機体名は「Archange(大天使)」。山吹色の垂直尾翼がとても目立つ機体でした。滑空順番は6番目でした。プラットホーム上では緩やかな向かい風が吹いていたので、初めての機体で空を飛ぶことになる学生パイロットにとっては最高の風で

した。プラットホームを飛び立った機体は高度を下げてスピードを増し、ほぼ直線的に飛びました。とても美しい滑空でした。長年の課題だったコックピットのハッチもちゃんと閉まりました。記録は403.43mでした。残念ながら、目標だった自己最高記録(2018年に記録した446.42m)を超えることはできませんでしたが、2021年以来、入賞から遠ざかっていたので、今年の結果は技術の津田沼航空研究会復活の良いアピールになりました。既に来年度の大会に向けて新体制で部員が機体設計に注力しています。引き続き、応援をよろしくお願い致します。

大会主催：読売テレビ <https://www.ytv.co.jp/birdman/news/index.html#w1nhf3ppce1jvpsf/>



安定して滑空するArchange



観戦スタンド前で応援する部員

第18回 風力発電コンペWINCOM2025

令和7年11月2日(日)に、津田沼校舎37号館8階にて第18回風力発電コンペWINCOM2025が開催されました。

今大会は23チームに参加いただき、発電量部門・エネルギー利用部門ともに大盛況のうちに無事終わることができました。

日本大学生産工学部校友会賞には、千葉県立千葉工業高等学校チームの「千工(ちこう)の風」、日本風力エネルギー学会 長井浩記念賞には、山形県立村山産業高等学校チームの「G.W.T(Green Wing Teal)」、最優秀賞には山形県立山形工業高等学校チームの「BLACK LILY δ」が選ばれました。また、昨年度より設けられた低風速域でいかに効率よく発電させるかを競う低風速評価賞には千葉県立下総高等学校チームの「下総Wind Power 2025 B」が選ばれました。来年度も、さらに盛大な大会となるようスタッフ一丸となって取り組む所存ですので、今後ともご支援の程宜しくお願いいたします。



全体集合風景



校友会賞受賞チーム

第23回 学生フォーミュラ日本大会2025出場結果報告

「学生フォーミュラ」は、公益社団法人自動車技術会が主催し、学生が自らフォーミュラ車両を設計・製作した上で、3種類の静的種目および5種類の動的種目によって総合的な車両性能と設計能力を競う競技会です。2003年の第1回大会以来、毎年9月上旬に6日間の日程で開催されており、第23回大会となる本年度は9月8日～13日に実施されました。海外11チームを含む86チームがエントリーし、延べ参加者数は約2万人に達するなど、国内最大規模の学生参加型工学イベントとして定着しています。

本学部公認サークル「フォーミュラJSAE」は、今回で17回目の大会出場となり、前年度に引き続きICV(ガソリンエンジン)クラスに参戦しました。本年度は、前年度に達成できなかった「総合25位以内」を目標に掲げ、サスペンションを含む車両減

衰特性の改善やエンジンレスポンス向上に重点的に取り組みました。例年に比べて車両完成時期を早めることができた結果、複数のドライバーが安定して性能を発揮できる、扱いやすい車両に仕上げることができました。

その成果として、「総合18位」という過去最高の成績を収めました。また、「初回の技術車検において最も指摘件数が少なく車検を通過したチーム」に授与される「ベスト車検賞(第二位)」を受賞し、設計・製作・品質管理にわたる日頃の取り組みが高く評価されました。

来年度も今年度以上の成果を挙げられるよう、引き続き車両開発とチーム力の向上に努めてまいります。今後とも温かいご支援・ご声援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

フォーミュラJSAE 顧問 風間恵介



走行中のチーム車両



集合写真

令和7年代議員総会報告

令和7年度日本大学生産工学部校友会代議員総会および懇親会が、2025年6月21日(土)に市川グランドホテル(千葉県市川市)で開催されました。当日は132名の代議員のうち14名の新代議員の参加がありました。

総会は総務委員長の小松 博 先生の司会によって進められて、土木部会 畑 慎二 部会長の開会の辞ではじまり、出席者全員での校歌斉唱、そして梅谷 純生 校友会会長による挨拶が行われました。議長は電気電子部会 三浦 俊宏 部会長が務め、事業報告は梅谷会長、そして決算報告は渡邊 昭廣 財務委員長、監査報告は大澤 慶吉 監査委員長により行われ、満場一致で承認されました。

閉会の辞は、数理情報部会 三宅 修平 部会長が務められ、代議員総会は終了いたしました。

総会後の懇親会では、これまでにご逝去されました生産工学部校友会会員の方々に哀悼の意を表し黙とうを捧げた後、総務副委員長の北野 幸樹 先生の司会で始まり、梅谷会長ならびに澤野 利章 生産工学部学部長の挨拶が行われました。次に来賓を代表し、金澤 宏昭 校友会本部事務局事務長よりご祝辞を頂き、野澤 達也 生産工学部事務局長の乾杯のご発声にて賑やかに祝宴が始まりました。

皆様終始賑やかに歓談され、建築部会 山下 至 部会長の閉会の辞でお開きとなりました。



梅谷純生生産工学部校友会会長のご挨拶



野澤達也生産工学事務局長の乾杯のご発声



金澤宏昭校友会本部事務局事務長のご挨拶

令和7年度 留学生交流会（バス旅行）

令和7年9月19日（金）、留学生を対象とした留学生交流会バス旅行を実施しました。目的は、留学生間の相互理解と親睦を深め、本学への帰属意識を醸成することです。今回の旅は、鹿島神宮・香取神宮・佐原の3か所を訪れる日帰りコースでした。

最初に訪れた鹿島神宮と香取神宮は、「東国三社」と呼ばれ、古代より「神宮」の称号を伊勢神宮と並び許された名高い神社です。両神社は、日本神話の「国譲り神話」に登場する大国主命に関わる神々を祀っており、神道文化や建築の荘厳さに触れることができました。

次に訪れた佐原は、江戸時代の水運で栄えた商家町で、「北総の小江戸」と称されます。蔵造りの商家や町家が立ち並び、江戸時代の面影を色濃く残しています。伊能忠敬の出身地としても知られ、町並み散策や「小江戸さわら舟めぐり」を通じて、日本の伝統的な生活文化を経験することができました。

このような貴重な体験は、校友会の皆様のご支援のおかげで実現し、参加者（24名）にとって忘れられない思い出となりました。今後も留学生の交流や親睦の促進に役立ててまいります。



母校を訪ねる会

令和7年度「第34回母校を訪ねる会」が開催されました。

令和7年度「第34回母校を訪ねる会」が学園祭(桜泉祭:旧泉祭)初日の11月2日(日)に日本大学生産工学部津田沼校舎39号館2階食堂で開催されました。

今年は、昭和49年/50年/59年/60年、平成6年/7年/16年/17年/26年/27年の卒業生と教職員OBの方々をご招待致しました。

当日はお天気にも恵まれ、招待年卒業生及びその他の卒業生:197名、教員OB:19名、そして校友会役員、学部執行部、現任教職員を含め、約300名の皆様に参加頂きました。また、学園祭にも多くの方々に来場頂き、桜泉祭を懐かしむと共に新しくなったキャンパスで躍動する学生たちの姿を見て頼もしく思われたのではないのでしょうか。

「母校を訪ねる会」では、坂本光弘機械部会長の開会の辞の後、澤野利章学部長、畑慎二土木部会長、石井進相談役のご挨拶を賜り、江森康弘事務局次長兼事務局長職務代行の乾杯で和やかに懇親会が開催されました。参加者の方々は旧友や恩師との久々の再会で昔話に花が咲いていました。三宅修平数理情報部会長の中締め後も皆様、名残惜しそうに歓談され、三浦俊宏電気電子部会長の閉会の辞でお開きとなりました。



澤野利章学部長のご挨拶



畑慎二副会長のご挨拶



石井進相談役のご挨拶



全体

在校生紹介

機械工学科

中村 綾音

私は幼い頃からものを作るのが好きでした。幼いときはビーズを使って額縁に入れて飾る作品や、生まれたばかりの従弟へのおもちゃをフェルトで作ったくらい手芸が好きでした。そんな私は、小学2年生のときに家族で日本科学未来館に遊びに行ったときに初めて人に対して癒しを与えるセラピーロボットのPAROを見ました。まだ幼かった私は技術ってすごいなあ、こんな面白いものあるんだ、くらいにしか思っていませんでした。

それから時が流れ、大学受験を考えているときに動画サイトで建設現場にいるアクロバットな動きができるロボットや配送会社の倉庫で活躍する荷物を運べる四足歩行のロボットを見つけました。こんなことができるロボットがいるの!?とかなり驚きましたが、それと同時にこういう面白いものが動く仕組みが知りたい、勉強してみたいと思うようになりました。手芸と系統は違うけどものを作ることを知りたい、幼いときに見たPAROのようなすごいロボットができる技術を学びたいと思いました。

入学後はロボットの勉強をするために必要な知識や技術を身に付けたいと考えました。そのため授業ではロボットに関することを2年半かけて1から学べる横断科目のRobo-BEを選択し、サークルでは宇宙技術研究会とエレクトロニクス研究会に所属していました。それから想像以上に忙しい日々が続き、高校3年生のときは理系クラスを選択していましたが、中学校でお世話になった先生に「物理苦手だね」と言われたくらい機械工学科で重要な物理が苦手でした。さらに授業では友人がクラス分けの都合上でない状況が続き、しんどさを覚えるようになりました。それでもロボットの勉強を諦めたくなくて、ひたすらに授業やサークルを通じて技術や知識を学んでいました。

宇宙技術研究会ではCan Satという小型の惑星探査機を製作し3月頃に行われる種子島ロケットコンテストに出場するという目標の元で活動していました。しかし技術不足と時間不足の影響で私が多く活動に関わっている間での出場は叶いませでしたが、1つのものを1から作る順序や材料の選び方、機構などを勉強することができました。

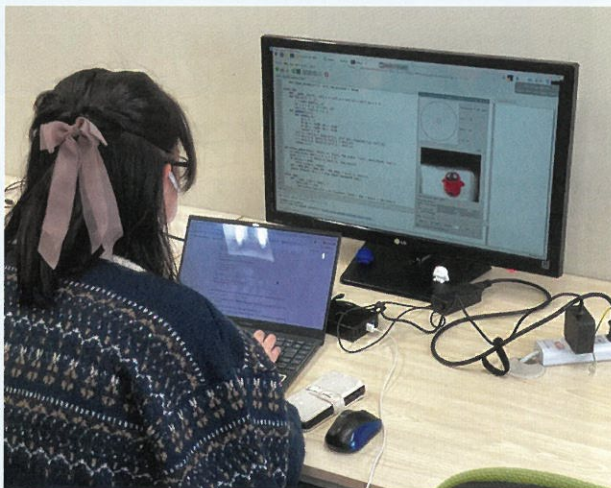
エレクトロニクス研究会は元々コロナの影響により休部になっていたサークルでした。偶然学籍番号が近かった代表から「エレ研を復活させたいから手伝ってほしい。」と頼まれて入部することを決めました。このサークルをどのように動かしたいか、どんな活動をメインにしていくかなどサークルの初代としての責任を感じながら右往左往しながらも活動の軸を迷いながら決めて、再び廃部にならないように活動の舵取りをしていました。

そんな中で私が1年生のときに仲良くなったサークルの院生から「この学科でロボットの勉強をしたいなら柳澤先生の研究室しかないよ。しかも倍率高いから行きたいなら1年生のときから成績良くないと入れないよ。」と言われました。そこから私は本気出して頑張り始めました。得意な科目は出来るだけ高い評価を頂けるように、苦手な科目は平均くらいの評価で単位は確実に頂けるように努力しました。紆余曲折はありましたがその結果、なんとか無事に柳澤研究室への配属が決まりました。

研究室は楽しくもあり大変でもありました。ロボットに関することを研究したくて、この研究室に配属してもらえるように1年生のときから努力していました。幸運なことにロボットや技術に興味を持ち始めたきっかけになったセラピーロボットに関する研究を行っている先生だったので、いくら大変でも難しいことしていても頑張り続けることができました。他の大学や学科ではあまりないような研究のジャンルに携わることができて本当に嬉しかったです。

この大学に入れて良かったと思ったのは色々な人に出会えたことです。同じ機械工学科の女性の友人たちはもちろん同じ柳澤研究室の先輩方や同期たち、製図や実験といった大変な実技授業のときに一緒に支え合った学友たち、まだ何も知識も技術もない私に色々教えてくれたサークルの先輩方や、ふらふらしながらサークルの舵取りをしている頼りない私について来て困ったことやわからないことで相談してくれる後輩たち、前同じような間違え方をしても根気強く教えてくれた先生方など、どこかで様々な形で私と関わった方々にすごく恵まれていると感じました。

私はこの学校で学んだことを活かしたい、ものを作る仕事に携わりたいと考えて設計職を軸に就職活動を行い、とある会社の設計職に就職することが決まりました。その会社は設計から製造まで1つの場所で行えるように工場が併設しており、時期によって様々な機械が見ることができるといって最終面接の際に伺って、工場も見せて頂いて、この会社だと自分が学んだことを活かしてすごく面白そうだと感じてそのときにその会社に就職したいと思いました。後日内々定を頂けたときすごく嬉しかったです。私はエレ研で他学部のサークルと協力して加工メインでものを作った経験があり、そのときに加工の難しさや図面の大切さを知ることができたので図面を正確に確実に作成するのはもちろん、私が書いた図面で間違いないように加工ができるか無理難題な加工をお願いしていないかといった加工する方のことも考えた設計ができる人間になりたいです。



ロボットのプログラムの確認



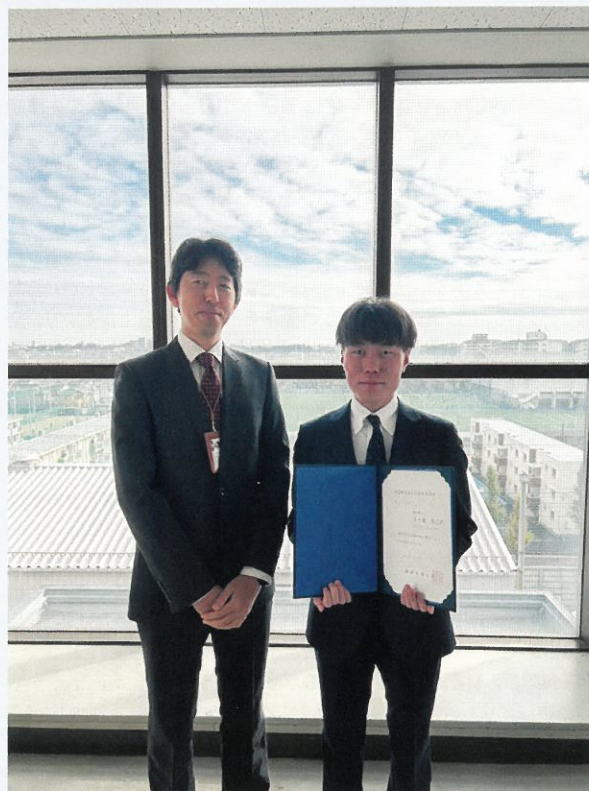
ロボットと戯れ中

在校生紹介

電気電子工学科

五十嵐 啓三郎

私は大学在学中に第二種電気主任技術者の資格を取得しました。大学1年次に第三種を取得したとき、「次に挑戦するなら今しかない」と強く感じ、2年次から二種の勉強を始めました。社会人になってからでは時間の確保が難しいと思い、大学生のうちが最後のチャンスだと考えたからです。勉強を始めた当初は、範囲の広さと難易度の高さに圧倒されました。独学では限界を感じ、加藤修平准教授に相談したところ、参考書を貸していただいたり、授業外でも時間を作って質問に答えてくださったりしました。先生は忙しい中でも丁寧に解説してくださり、本当に感謝しています。しかし最初のころは、教えていただいても内容が理解できず、ただ「わからない」と繰り返すばかりでした。せつかく時間を割いてくださっているのに、自分が何を理解して何がわかっていないのか整理できておらず、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。そこで、「先生の時間を無駄にしないようにしましょう」と決意し、質問する前に自分なりに考え、理解できていない部分を明確にしてから聞くようにしました。この姿勢の変化は、勉強への取り組み方を大きく変えました。「先生の期待に応えたい」という気持ちが強いモチベーションになり、理解できることが増えるたびに学ぶ楽しさを実感しました。合格通知を受け取ったときは、これまでの努力と支えてくださった方々への感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。この経験を通して、知識だけでなく「学び続ける姿勢」と「人の支えに感謝する気持ち」の大切さを学びました。今後もこの経験を糧に、より高度な技術や知識を身につけ、社会に貢献できる技術者を目指していきたいとします。



土木工学科

東條 七菜

私が土木工学科を志望した理由は、社会基盤を支える土木技術を体系的に学びたいという思いからです。中でも本学部の土木工学科は、充実した専門講義に加えてクォーター制を採用しており、学習計画を柔軟に立てやすい点に大きな魅力を感じました。また、生産実習を通して現場の実務を経験し、講義で得た知識を実践と結びつけながら深められる環境にも惹かれ、進学を決意しました。

4年間を振り返ると、私が大切にしてきた軸は「自分にとって意味のある選択をすること」です。クォーター制の特性を活かし、まとまった休暇には旅行やコンサートへ積極的に出かけ、自ら計画を立てて行動する力を養いました。その一方で、学業や課題には妥協せず取り組み、資格取得にも継続して力を注ぎました。自由度の高い大学生活だからこそ、自分を律し、目的意識を持って学び続けたことが大きな成長につながったと実感しています。

研究室の選択においても「成長できる環境」を軸に判断しました。友人とは別の研究室を選ぶ不安はありましたが、自らの選択を信じ挑戦したことで、研究への向き合い方が大きく変化しました。また、写真に示すように授業の受け方や資格勉強の進め方、研究の取り組み方など、これまで得てきた経験を後輩へ積極的に共有するようになり、自身の学びを他者に還元できるようになったことも成長の一つです。

こうした主体的な取り組みと、土木工学への継続的な努力が実を結び、私は建設業界の大手コンサルタント企業への就職が決まりました。大学で培った専門知識と経験が進路選択に確かな影響を与えてくれたと感じています。卒業後は土木技術者として社会の発展に貢献するとともに、これまで支えてくださった先生方や仲間への感謝を、成果として返していきたいと考えています。



就職活動の経験を後輩に伝えている様子

在校生紹介

建築工学科

辰巳 史晃

私の好きな言葉に「心を積極的にする」というものがあります。大学生活を振り返ると、まさにこの言葉を指針に、多くの挑戦や挫折を乗り越えてきたように思います。悩みや迷いを抱えながらも、仲間や先生方に支えられ、自分の中に確かな成長を実感する日々でした。特に4年生の一年間は、アイデアコンペへの挑戦、自主創造プロジェクトの代表、そして幹事会の幹事長など、多様な役割を同時に担い、自分の弱さや限界と向き合う時間が多くありました。しかしその度に「心を積極的にする」という姿勢が、私を前へと押し出す原動力となりました。

なかでも、日本大学自主創造プロジェクトで取り組んだ「風月茶室プロジェクト」は、大学生活を象徴する経験です。4畳半の茶室をゼロから設計し、材料の調達、構造検討、施工計画まで、建築が立ち上がるまでの全過程を自分たちの手で進めました。「本当に立つのだろうか」という不安を抱えながら積み上げた木の正方形ユニットが、最終的に28段の積層となって空間として“生まれた”瞬間の喜びは忘れられません。完成した茶室を前に仲間と分かち合った達成感は、建築の魅力と手応えを強く実感させてくれました。

また、「こどものまちないえワークショップ提案コンペ」では優秀賞を受賞し、三神くんと議論を重ねて子どもの視点に寄り添う提案を形にしていた過程が、大きな学びとなりました。幹事会での活動では、桜泉祭の御神輿運営や学科行事の企画を通し、「参加する側」から「運営する側」へと視点が変わることで、行事を支える努力や責任の重さを実感し、マネジメント力やチームワークの基礎を磨くことができました。振り返れば、大学1年生はコロナ禍で建築に触れる機会が限られていました。

しかし、2年生で先輩の卒業設計を手伝ったことをきっかけに建築の奥深さに惹かれ、放課後のワークステーションに自然と集まり、仲間と議論し合う時間が自分の設計姿勢を育ててくれました。これから大学院に進学しますが、「心を積極的にする」という姿勢を大切に、自分のルーズさとも向き合いながら、挑戦を続け、成長していきたいです。



風月茶室プロジェクト

応用分子化学科

三井 さゆり

私の大学生活における一番大きな出来事は、理科の実習生として教育実習に行ったことです。1年生の後期から受講を始めた教職課程でしたが、5,6時限目のほかに長期休暇期間や土曜日に設置されている講義も多く、スケジュール管理や体調管理には気を使っていました。学科の講義との両立もあり、アルバイトはすぐにやめてしまいましたが、自分にとって最も大切である学びを優先した結果であり、すべての科目に全力で挑むことができたことから、今振り返るととても充実していた大学生活だったと思います。また、教職課程の受講によって一般教養、教育方法、教育の歴史について学び、沢山の知識を身につけることができました。特に理科実験の講義では、基礎的な理科実験を通して原理を一から学ぶことができたと考えています。発表の機会も多く設置されていることから、学科の講義でも学んだ発表技術が役に立つ場面が多くありました。

4年生の6月に行われた教育実習では、母校である千葉日本大学第一高等学校に実習生として受け入れて頂きました。初日はとても緊張していましたが、生徒の皆さんとの交流を通して徐々に緊張がほぐれていったことを覚えています。実習で初めての授業を行った際、想定していたように授業が進行しないことや、教材研究の不足を感じる場面が数多くあり、沢山の反省点がありました。しかし、担当教員からのアドバイス、授業見学で得た授業の技法や生徒の皆さんからの率直な意見を取り入れて授業を構成し、改善を繰り返したことで少しずつ反省点を減らすことができたと考えています。また、実習最終日に行われた研究授業では、緊張のあまり上手いかわない場面もありましたが、無事に授業を実施することができたと思います。

最後に、教育実習を終えて4年間諦めずに教職課程の受講を続けてきて本当に良かったと改めて感じています。しかし、これは家族のサポートがあってのことです。4年間サポートをしてくれた家族にはとても感謝しています。



教育実習における担当クラス

在校生紹介

マネジメント工学科

森 雅也

●博士後期課程での研究活動

私は博士前期課程を他大学で修了し、博士後期課程より日本大学に在学しています。博士後期課程では、サンプルの数が少なくデータの多様性が制限されている小標本データを対象とした、人工知能(AI)モデルの提案および応用について研究しています。

一般に、AIを活用するには、十分なサンプルの数と多様性を備えたデータセットの存在が前提とされています。しかし、この条件を満たすことが難しい分野は少なくありません。例えば、医療分野では、プライバシー保護の観点からデータの共有が制限されることがあり、十分なデータを収集できない場合があります。このような制約下では、構築されたAIモデルの妥当性や信頼性が損なわれるおそれがあります。小標本データを前提としたAIの研究は、これらの課題を克服する上で重要な役割を果たすと注目されています。

実際に、本研究テーマは日本学術振興会特別研究員DC2の研究課題として採用されており、第41回ファジィシステムシンポジウム(FSS2025)では、パターン分類およびクラスタリングのセッションにおいて、優秀発表賞を受賞しました。

●研究活動を通して学んだこと

第一に、何事にも挑戦する姿勢の重要性を学びました。たとえ困難な課題であっても、最善を尽くして挑戦することによって、多くの成果や新たな機会につなげることができました。このような姿勢は、成功と失敗のいずれの場合でも、新たな気づきに繋がりと、次の機会に活かす基盤になったと感じています。

第二に、継続的な実践が成長に直結することを学びました。書籍や論文から研究に必要な思考力や技術力を学ぶことは欠かせませんが、実際に手を動かし、発表や執筆を重ねることが、自身の成長において最も重要であったと感じています。博士前期課程の頃には完成度が高いと思っていた自身の論文も、今読み返すと多くの改善点が見つかります。これは、実践を繰り返し、経験を積んだことによる成長の表れであると考えています。



国際会議での研究発表の様子

創生デザイン学科

福岡 千夏

日本インテリアデザイナーズ協会が、隔年で実施している学生対象の産学連携活動「第4回JID次世代を担うデザイン展2025(新宿パークタワー・OZONE)」に創生デザイン学科として参加しました。私は本プロジェクトのリーダーとして、学年の枠を越えて集まった約37名の学生を取りまとめ、企画立案から制作、展示構成を牽引しました。本展は将来のデザイナー育成とインテリア産業の活性化、さらに学生と業界との交流機会を創出することを目的としています。

私たちは株式会社スペースとの産学協同のもと、「大久保商店街の活性化」をテーマに掲げ、地域社会と学生の新たな関わり方を探りました。

活動初期には、商店街会長や地域拠点「大久保ベース」の方々とのブレインストーミングを行い、課題や魅力を多角的に整理しました。その中で、学生は魅力ある店舗が数多く存在するにもかかわらず、十分に認知されていないという課題を発見しました。この気づきをもとに、私たちは地域の声を集めて魅力を発信する「大久保推しエールマップ」の制作を開始しました。学生は店舗を訪ねて店主へのインタビューを行い、夏祭りでは地域住民から商店街への「推しコメント」を集めるとともに、子ども向けのアクリル端材ワークショップも実施しました。世代を超えて集まった声は、商店街の魅力を改めて捉え直す重要な手がかりとなりました。

新宿パークタワー・OZONEにおける展示では、調査プロセスや夏祭りでの交流の様子を「空間表現」として構成し、成果だけでなく「人と人のつながりが生み出すデザイン」を可視化することを意識しました。展示会の最終日に表彰式が開催され、地域を意識し、地域と共に実施した活動が評価され優秀賞を受賞しました。

今回のプロジェクトを通して、地域課題の解決には対象を理解するだけでなく、丁寧な関係構築が欠かせないことを実感しました。また、空間デザインにプラスして、デザイン思考に基づいた論理的なデザインの学びを社会実践へと結びつけた経験は、私たち学生には大きな成長の機会となりました。



JID次世代を担うデザイン展にて



大久保商店街の活動

在校生紹介

数理情報工学科

土屋 慶太

「後悔のない卒業」。これは1年生の8月にオーストラリアの海で設定した、私の大学4年間の目標です。入学当初、私には何も目標がありませんでした。入学前からシリアスゲームという分野への興味がありつつも、当時の自分には何をすべきか全く思いつきませんでした。そこで、入学前から憧れていた海外に1人で行って様々な人と話す中で、「後悔のない卒業」という漠然とした目標とそれのための要素として、これまでの自分とは異なる、「成果を出すこと」を据えました。

帰国後は成果を出すために必要な要素を整理し、すぐに自分ができると感じた「高成績でたくさん単位を取ること」、「英語力を伸ばすこと」を軸に今できることから取り組みました。その結果、Glo-BEの修了、英語や情報分野に関する資格を取得することができました。また、ゲームプログラミングを自ら学び、3年次にはシリアスゲーム研究を行う古市研究室に配属されました。

研究室配属後は、チームによるシリアスゲームの研究開発を行いました。3年次にはまだ必修科目も多く、初めての研究活動になかなか時間が取れない人も多いです。しかし、私は計画的に多くの単位を取得していたので研究に時間を費やすことができました。私は初めて論文を読んだとき、1つ1つの単語や文に含まれる情報量に圧倒され、多くの複雑な事柄をうまく整理した文章に衝撃を受けたことを今でも覚えています。

研究開発において、私はチームの中核を担わせて頂きました。チームには古市研の学部生に加えて、博士後期の先輩、オランダからの留学生たちも加わり、約1年で教育分野に関する2本のシリアスゲームを開発しました。この過程ではこれまで培ってきた英語力、日本や韓国で開催されたシリアスゲームジャムへの参加経験がチーム活動を進める上で非常に役立ちました。国内外のゲームジャムで知り合った友達や留学生とは現在も連絡を取り合う仲になっており、友達の輪は世界に広がっています。

研究活動においても私は成果を意識していました。3・4年次には研究成果を論文とし、4年次の11月までに2度の日本デジタルゲーム学会とベルギーで開催された国際会議Game-Onの計3回学会発表を行いました。また、開発したゲームは東京ゲームショウ2025に出展し、世界にリリースしています。Game-Onや東京ゲームショウは帰国した留学生や研究室の歴代の先輩方と交流する場ともなり、とても楽しい時間となりました。さらに、開発したゲームはNHKの番組にも取り上げられ、我々の研究成果が多くの人に知られる機会となりました。

研究を通じた学びや成果は学内外からも評価して頂き、卒業後は外部の大学院でシリアスゲームに関する研究を継続します。チームメンバーは全員異なる場所で活躍することになりますが、個人的なコンタクト以外にお互いの成果で連絡を取り合うことができればすごく面白いと思います。まだまだ実力不足な私ですが、運良くたくさんの人と様々なことを楽しみながら学び、経験できた大学生活に後悔はありません。ありがとうございました。



開発したシリアスゲームの展示



NHKスタジオ収録

在校生紹介

環境安全工学科

山本 稜大

大学生活の中で印象に残っていることは、桜泉祭のお神輿行列です。私は桜泉祭お神輿の学科幹事長として全体をまとめる役割を任されました。私は何事にも「やるからには全力で。」を目標にこれまでの創作を活かしつつ、自分たちの考えを融合したいと思いました。作業開始の当初は、どこから手をつければ良いのか戸惑い苦勞しましたが、お神輿の状態を確認し、三週間ほどの短い期間の中でできることを考えました。これまでのお神輿は、木目調がメインで「彩り」がないことに気づきました。特に木材の塗装、装飾のリニューアルなどを行いました。

修繕が始まると、予想以上に作業は時間を要しました。卒業研究のスケジュールなどでメンバーが思うように集まらず、来てくれているメンバーにも申し訳ない気持ちがありました。ここで幹事長としての姿勢を見せないと周りのモチベーションが低下してしまうと考え、自分が一生命動き参加したメンバーに声をかけるなどして工夫して行いました。そうすると自然に「他に手伝えることはある？」と尋ねてもらえ、自主的に動いてくれるメンバーが増えて効率的に進めることができました。次第にみんなが自分の役割に責任を持つようになり、作業のスピードと質もどんどん上がっていきました。幹事長として現場を巡回しながら全体のサポートも行い、作業を重ねるうちに、お神輿が少しずつ彩り豊かになっていく様子が目に見えてわかり、達成感を感じることができました。

桜泉祭当日、担ぎ棒に肩を入れると、重さと同時に仲間存在を強く感じ、自然と声そろって掛け声が生まれました。商店街を練り歩くうちに、お世話になっているお店へ店名の掛け声をしました。商店街を練り歩くうちに、お世話になっているお店の店名の掛け声が始まり、さらに掛け声は大きくなり、メンバーの一体感は最高潮に達しました。その時、苦勞して作業に取り組んだ日々が報われるような感覚がありました。

桜泉祭も終わり、お神輿グランプリで優勝した時が一番ほっとしました。幹事長として仲間をまとめ、全員で一つのものを作り上げた経験は、責任感とリーダーシップの大切さを実感させてくれました。一人では決して成し遂げられない人とのつながりを強く学ぶことができたと感じています。本当に仲間には感謝しています。



お神輿係の集合写真



表彰式後

学科ニュース

機械工学科

学生数

学部生905名 / 大学院生(前期)53名・(後期)4名

トピックス

①オープンキャンパス

7月13日(日)、8月3日(日)にオープンキャンパスを実施しました。今年度は在校生に講義や研究だけでなく、大学生としての日常を含めて、来場された高校生や保護者の方々に説明してもらいました。3Dプリンタを使ったデジタルものづくりや、エンジンの燃焼実験などの体験学習も実施し、機械工学科の最新の研究と学びが体験できる企画を実施しました。当日の様子は機械工学科のInstagram(@nichidai.seisan.kikai)や学科HPでも紹介させていただきましたので、ぜひご覧ください。

②日本大学三島高校との高大連携講義を実施

昨年度に引き続き、日本大学三島高校様と「総合的な探究の時間」において、「AIと3Dプリンタで“つくる”を探究する生産工学プロジェクト」を実施しております。1年間を通して、自分たちにとって必要なロボットを考え、生成AIやCADを用いてモデリングや動き方を検討し、その結果を多くの方々の前で発表してもらう予定です。昨年度から生産工学部でのフィールドワークも実施し、大学での学びや学習環境にも触れてもらっております。



オープンキャンパス



昨年度に実施したフィールドワーク参加学生

電気電子工学科

学生数

学部生837名 / 大学院生(前期)55名・(後期)2名

人事

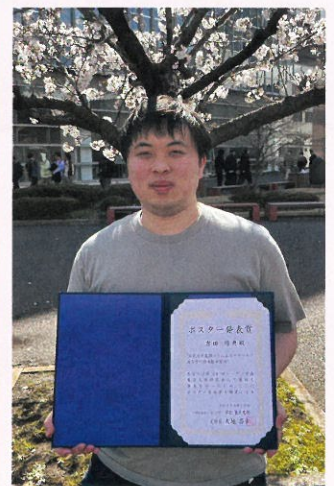
今年度は飯田和昌教授が学科主任、石澤淳教授が専攻主任として学科・専攻の運営に携わっております。

トピックス

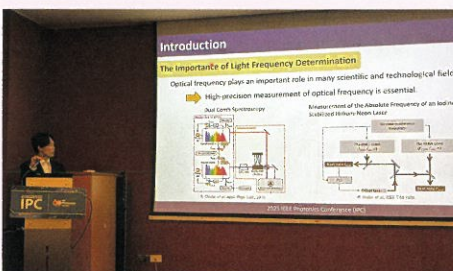
修士2年生 佐野直哉君が、第45回レーザー学会学術講演会年次大会(広島国際会議場)にて、論文発表奨励賞を受賞しました。また修士2年生吉田靖典君が、第24回レーザー学会東京支部研究会にて、ポスター発表賞を受賞しました。さらに修士2年佐藤優成君、修士1年中野晶博君・大久保樹人君の3名が、11月9日~13日にシンガポールで開催されたIEEE Photonics Conference 2025にて口頭発表を行いました。



佐野 直哉 君



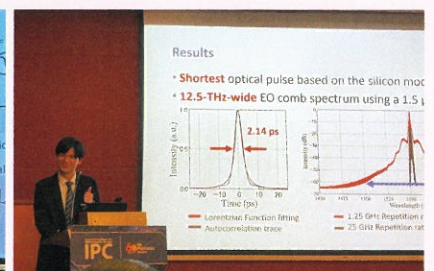
吉田 靖典 君



佐藤 優成 君



中野 晶博 君



大久保 樹人 君

学科ニュース

土木工学科

学生数

学部生762名 / 大学院生(前期)33名・(後期)6名

人事

今年度は秋葉正一教授が学科主任、高橋岩仁教授が専攻主任として学科・専攻の運営に携わっております。

また、本年4月には朝香智仁准教授が教授に、野口博之助教が専任講師に昇格されました。なお、昨年度は小田晃教授が定年退職され、現在は特任教授として学生の教育にご尽力いただいております。

トピックス

4月のガイダンス期間中に毎年恒例のオリエンテーションを実施しました。これまでは学外へ出て、友人作りやチームワークの大事さを体験するような内容でしたが、今年度は学内において実施しました。例年に比べるとバス移動がない分、充実した内容であったと思います。

11月にはコロナ禍で中断しておりましたが、社会で活躍されている方々のご協力を得て学生教育およびキャリア支援を行うことを目的としたキャリア支援センターの会合が、今後は校友会土木部会とコラボして活動する再スタートの会を桜門会館で行いました。



オリエンテーションの様子(津田沼校舎39号館内)



キャリア支援センター意見交換会(桜門会館)

建築工学科

学生数

学部生918名 / 大学院生(前期)86名・(後期)3名

トピックス

建築工学科1年生、建設現場見学会を実施

建築工学科では令和7年11月12日、1年生214名を対象に建設現場見学会を実施しました。株式会社鴻池組、株式会社安藤・間、株式会社熊谷組、東急建設株式会社の協力のもと、東京都・千葉県・埼玉県・茨城県の計10現場を訪問し、学生は午前・午後で異なる現場を見学しました。

各現場では、鉄骨が立ち上がる段階や断熱・LGS・ボードといった内装工程、さらには基礎工事中の現場など、建物ができあがる過程を段階的に見ることができました。学生は、構造・設備・仕上がりなどのようにつながって一つの建築を形づくるのかを実際の空間で確認し、教室で学ぶ知識との結びつきを実感しました。こうした体験は、建築ものづくりを部分ではなく全体として理解する力を養う貴重な機会となりました。



現場の様子1



現場の様子2

応用分子化学科

学生数

学部生730名 / 大学院生(前期)65名・(後期)3名

人事

学科主任に田中智教授、専攻主任に柏田歩教授が任命されています。また、昨年度に山田和典教授、伊東良晴助教が退職され、令和7年度の教員構成は、教授8名、准教授5名、専任講師1名、助教1名です。

トピックス

- グッドプラクティス顕彰および永年認定表彰の受賞
本学科の設置コースである国際化学技術者コース(JABEE認定)の取り組みにおいて一般財団法人 日本技術者教育認定機構化学分野JABEE委員会より優れた技術者教育事例として「化学物質の製造プロセスを題材としたPBL演習・実験プログラム」がグッドプラクティス顕彰を受賞しました。また、長年に渡って優れた技術者教育を実施しているプログラムとして「永年認定表彰 認定期間20年」を受賞しました。本学科では引き続き優れた技術者教育を継続していきます。
- 佐野日本大学中等教育学校とフィールドワークを含む総合的探求の時間を実施
佐野日本大学中等教育学校と総合的探求の時間として印旛沼においてマイクロプラスチックの環境中への蓄積についてフィールドワークを実施しました。当日は天候にも恵まれ、実際にボートに乗って堆積物を採取するなど体験してもらいました。世界的に問題となっているマイクロプラスチック汚染について学んでいただく良い機会となったかと存じます。



佐日FW

マネジメント工学科

学生数

学部生213名 / 大学院生(前期)19名・(後期)3名

人事

令和7年4月1日より堀尾志保先生が助教として、齊藤光平先生が助手として着任いたしました。教員構成は、教授8名、准教授1名、専任講師が2名、助教が2名、助手が2名です。

トピックス

学部生213名、大学院博士前期課程19名、大学院博士後期課程3名(社会人2名を含む)が入学しました。新入生を対象に、親睦を深めるためオリエンテーションとして成田山新勝寺の周辺でフォトアドベンチャーを実施しました。5/17のスポーツ大会では、学生同士が力を合わせて親睦を深める事ができました。その他、学科内の紹介や学科に関する内容についての最新情報はInstagramやXなどのSNSでも随時投稿しています。大学院生や教員の研究活動も活発に行われ、大学院生や教員が国際会議などで活発に研究発表を行っています。



成田山新勝寺付近でのオリエンテーション



航空科学博物館

学科ニュース

数理情報工学科

学生数

学部生738名 / 大学院生(前期)47名・(後期)4名

人事

令和7年4月に谷口茂先生が助教として着任されました。数理工学を専門とされており、衝撃波などの強い非平衡現象のコンピュータシミュレーションに関する基礎研究から、企業などが保有する実社会データへのデータサイエンス手法の適用や解析ソフトウェア開発などの応用研究まで、幅広く研究を展開されています。講義および演習では、「離散数学」や「プログラミング及び演習Ⅱ」などの科目を担当されています。

トピックス

●スポーツ大会は雨天中止、それでも温かいご支援に感謝
生産工学部では毎年、1年生向け学科対抗のスポーツ大会が開催されていますが、今年はいにくの雨により中止となってしまいました。しかし当日は、数理情報工学科の校友会(OB・OG)の皆様から、学科カラーである“青”のロゴ入りTシャツが1年生全員に贈られました。中止という残念な状況ではありましたが、学生たちはTシャツを大変喜び、先輩方からの温かい応援を強く感じていました。校友会の皆様には心より御礼申し上げます。



谷口先生



数情Tシャツ

環境安全工学科

学生数

学部生528名

人事

人事では4月より吉野悟准教授が教授に昇格されました。

トピックス

令和7年4月に144名の新入生を迎えました。4月の学外オリエンテーションでは、東京タワーからスカイツリーまでフォトアドベンチャーを行いました。当日配布されたクイズを同じチームのメンバーで解きながらゴールのスカイツリーを目指しました。一緒にクイズに取り組むことで交友が深まったようです。

研究では、永村研究室が取り組んでいる「富里の谷津」プロジェクトが、「産官学民の連携による遊休農地を活かした多機能な湿地グリーンインフラの共創」として、清水建設株式会社や国立研究開発法人国立環境研究所、富里市や地元市民団体らとともに、令和6年度土木学会環境賞を受賞しました。

桜泉祭では、お神輿グランプリで見事優勝することができました。これでグランプリ6連覇となりました。4年生が卒業研究の合間を活用してお神輿の装飾など行い、彩り豊かにしました。



オリエンテーションの様子



土木学会環境賞受賞者のみなさま

学科ニュース

創生デザイン学科

学生数

学部生594名

人事

令和7年度から助教として、山口穂高先生が着任いたしました。

また、早川健太郎先生が助教に昇格されました。



山口先生

トピックス

創生デザイン学科では、地域との連携を重視し、学生が社会の課題に気づき、その解決に向けて実践的に取り組む力を育成しています。

これまで続けてきた、千葉市様、UR都市機構様、(株)良品計画様、(株)MUJI HOUSE様、花見川団地商店会様と連携した「花見川団地」をフィールドとする授業・研究活動に加え、佐倉市様と協力した青菅分校の保全活動、近隣自治体様とのデジタルアプリケーションを核としたプロジェクトなど、多様な取り組みを行ってまいりました。さらに本年度は、新たに東京都羽村市様、(株)東京ランドスケープ研究所様との連携協定を締結し、「羽村市水上公園の将来活用」に関する提案活動を実施しました。本活動には、1年生から4年生まで有志の学生20名余りが参加し、複数のグループに分かれて作品を制作し、いずれも高い評価を頂戴しました。また、大久保商店会様のご協力のもと、(株)スペース様と大久保商店街の活性化を目的とした提案活動も並行して実施しております。詳細につきましては、学生紹介の欄でご紹介しておりますので、ご覧ください。創生デザイン学科では、現場での観察や生活者の声を大切に、そこから本質的な課題を見きわめ、より良いデザインへと結びつける視点と力の育成を今後も、より一層、大切にまいります。



現地調査の様子



提案の評価会

教養・基礎科学系

人事

令和7年度も、大熊康典教授が引き続き主任として教養・基礎科学系の運営に携わっています。また、今年度4月より、朝本紘充准教授、佐藤友彦准教授、三角尚治准教授の3名が教授に、秋田紘長助教、皆川祐太助教の2名が専任講師にそれぞれ昇格しました。その結果、令和7年度の教員構成は、教授18名、准教授12名、専任講師6名、助教8名となっています。

トピックス

今年度の活動として、7月13日と8月3日のオープンキャンパスにおいて、本学部独自の教育プログラムであるELサイクルをベースにした科目を紹介する「EL studio」に参画しました。特に7月13日には、林真理子理事長が「EL studio」の会場に訪れ、本学部の取り組みをご覧になりました。教員の活動では、5月に朝本紘充教授、間田潤教授、松本真和教授が連名で関東工学教育協会賞(論文・論説)を受賞し、続く6月には秋田紘長専任講師が日本海学会賞(奨励賞)を受賞しました。さらに、本学部の海外派遣制度に基づき、安田知絵准教授(中期派遣)と高寄正樹准教授(長期派遣)の2名が海外での研究活動に従事しました。



「EL studio」の会場の様子



「EL studio」の教員および学生スタッフ



日本大学生産工学部 校友会誌「桜生工」

発行者：日本大学生産工学部校友会
住 所：千葉県習志野市泉町1-2-1
T E L：047-476-1140
F A X：047-476-3510
E-mail：nuitkoyukai@nippon.email.ne.jp
W E B：www.seisan.nihon-u-koyukai.com

発行日：令和8年3月1日
制 作：株式会社 仁友社
住 所：東京都町田市森野2-31-17
T E L：042-738-4300
編 集：日本大学生産工学部
校友会広報委員会

